

## ホームレス等相談・地域生活支援事業 報告書



### 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

特定非営利活動法人 自立支援センター ふるさとの会

## 《目次》

### ホームレス等相談・地域生活相談事業 報告書

1. 事業の取り組みにあたって.....	3
2. 目的.....	3
3. 事業実施内容.....	3
3-1 実績（アウトリーチ、配食）.....	3
配食人数（配布食：おにぎり、パン等）.....	4
隅田川アウトリーチエリアのテント数の変動.....	6
隅田川(墨田区側)テント数（2013.03.11 現在）.....	7
3-2 路上生活者に対するアンケート結果.....	8
3-3 路上生活者からの主な相談内容・アウトリーチの具体的な活動等.....	11
各月の主な活動経歴・相談内容.....	11
3-4 説明会の感想.....	15
3-5 具体的な支援事例.....	15
4. ボランティア.....	16
4-1 実績.....	16
4-2 ボランティアの感想.....	16
5. むすびにあたり.....	18

## 1. 事業の取り組みにあたって

先日、厚生労働省による路上生活者の実態調査の結果が公表され、現に路上生活を余儀なくされている方の数は減少傾向にあるものの、一方で路上生活者の高齢化・長期化が進んでいることが明らかになった（注1）。当会が毎週アウトリーチ活動をしている隅田川周辺の状況も例にもれず、炊き出しに並ぶ人の数が年々減少する一方で（年末年始の炊き出し実績：949人（10-11年）→855人（11-12年）→754人（12-13年））、高齢者の姿が多く目についた。相談のなかでも、「（生活保護へのバッシングが強まり、保護申請時の扶養照会がクローズアップされたことを受けて）親族に迷惑をかけたくないので生活保護は受けたくない」、保護を受けるようになって「（これまでアパート暮らしの経験がないので）地域での生活を送れるか不安だ」という声をよく耳にした。実態調査において、路上生活者の「今後の希望」として「路上生活のままでいい」との回答が35・1%にも達しているのもこのような事情がある。また、2009年3月に発生した高齢者施設たまゆらの火災事件（注2）以降、「生活保護を受けるようになったら自分も都外の施設で暮らさざるをえない」と、不安を口にする高齢者も少なくない。

当会としては、当助成金事業におけるアウトリーチや応急援護的な支援を大きなきっかけにして、その後に地域生活に移るための転宅支援を提供する中間施設の運営や、地域で生活を送るようになった以後の日々の暮らしまで継続的に支援している。今年度の事業では、生活保護や地域生活に関する説明会を実施することで、路上生活者が抱える不安や支援のニーズに応えられるよう取り組みを強化した。

注1 平成24年「ホームレスの実態に関する全国調査検討会」報告書の公表について  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002rdwu.html>

注2 2009年3月に群馬県渋川市の無届け高齢者施設「静養ホームたまゆら」で火災が起き、入居者ら10名が死亡。内、6名が墨田区の生活保護受給者であった。低所得の単身高齢者が安心して生活して暮らす場が都内では圧倒的に不足している現状が明らかになった。

注3 2013年1月6日 朝日新聞朝刊「東京23区生活保護の高齢者 都外施設入居、4年で2.6倍」  
たまゆらの火災以降、行政が対策に取り組んできたにも関わらず、都外施設での生活を送る被保護者の数が2.6倍に急増しており、都内における受け皿の整備が急務になっている。

## 2. 目的

路上生活者がこの事業を通じて、地域のなかで、安定した住居を確保し、安心した生活を実現し、社会のなかで再び人としての役割や尊厳・居場所を回復することが目的である。

## 3. 事業実施内容

### 3-1 実績（アウトリーチ、配食）

#### ○実施期間

H24年5月07日～H25年3月25日までの間、合計 **48回**行いました。

#### ○配食人数

この事業を通じて、述べ **2960人**に配食活動を行った。配食をしたのはテントでの生活をす路上生活者と移動層（※1）である。

## ○対象地域

隅田川（墨田区側）の水神大橋付近から、下流の言問橋付近の河川敷を対象に実施した（7頁参照）。

この場所は以前、「ホームレス対策」として都・区共同事業として実施された「ホームレス地域生活移行支援事業」（※2）の委託を受け、当法人が平成16年から平成19年まで路上生活者に対してアウトリーチを行った対象地域に位置する。また、ボランティアサークルの時代を含めて、当法人が長期にわたり路上生活者と関わってきた場所でもある。そうした支援の一方で、現在も路上生活を続けている方は、先述したような生活保護に対する世間の厳しい視線に加えて、個々人の抱える様々な事情によって、生活保護を中心にした福祉制度の利用に繋がらなかった。つまり、路上生活がとりわけ長期にわたっている方が対象者の中心となっている。加えて、新たに路上生活者を余儀なくされた方を対象に、当助成事業の「ホームレス等相談・地域生活支援事業」を通じて支援を行った。

※1 「移動層」…昼間は仕事をしていたり、公共施設などを転々として時間を過ごしていたりするが、夜間になると雨風をしのげる場所を探して睡眠をとるホームレスのことを指す。

※2 「ホームレス地域生活移行支援事業」…都区共同事業として実施。公園で生活しているホームレスの地域における自立生活への移行を目指し、借り上げた住居等を提供し、あわせて就労や生活に関する支援を行う。

## 配食人数（配布食：おにぎり、パン等）

日時	テント	移動層	配布食総数
2012年5月7日	49	7	56
2012年5月14日	52	8	60
2012年5月21日	43	7	50
2012年5月28日	38	9	47
2012年6月4日	34	10	44
2012年6月11日	44	9	53
2012年6月18日	61	8	69
2012年6月25日	57	11	68
2012年7月2日	50	13	63
2012年7月9日	50	12	62
2012年7月23日	49	11	60
2012年7月30日	46	9	55
2012年8月6日	55	16	71
2012年8月13日	50	9	59
2012年8月20日	60	8	68
2012年8月27日	53	9	62
2012年9月3日	49	12	57

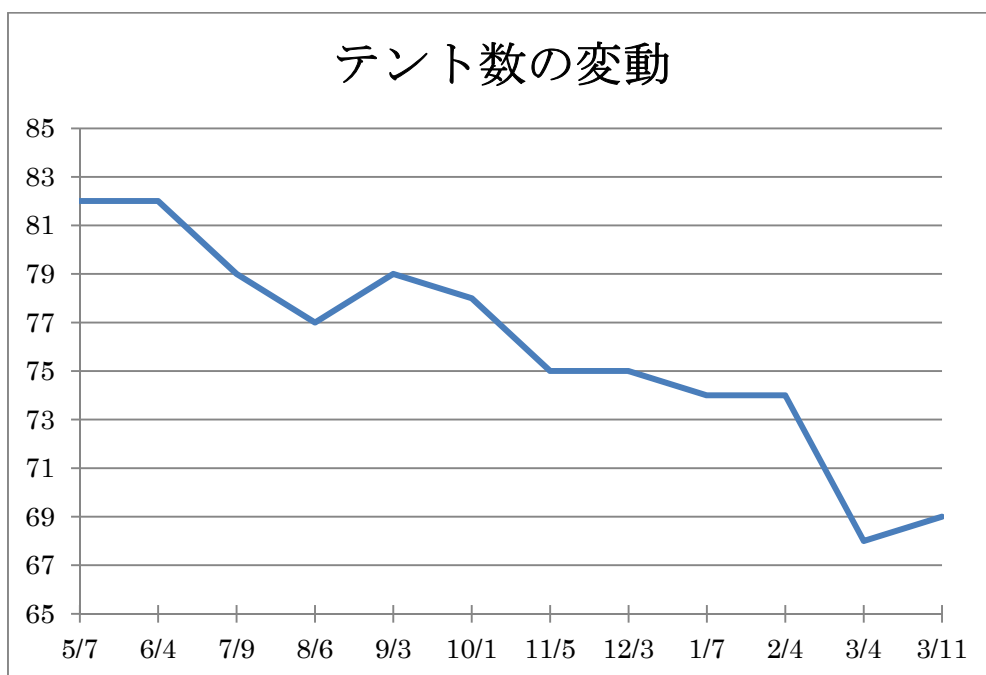
2012年9月10日	57	7	57
2012年9月24日	53	12	53
2012年10月1日	49	13	62
2012年10月15日	49	11	60
2012年10月22日	46	14	60
2012年10月29日	54	6	60
2012年11月5日	48	8	56
2012年11月12日	53	11	64
2012年11月19日	58	14	72
2012年11月26日	52	16	68
2012年12月3日	51	12	63
2012年12月10日	51	12	63
2012年12月17日	54	11	65
2012年12月29日	68	7	75
2012年12月30日	70	4	74
2012年12月31日	63	8	71
2013年1月1日	31	12	43
2013年1月2日	62	10	72
2013年1月7日	55	9	64
2013年1月21日	56	9	65
2013年1月28日	67	15	72
2013年2月4日	52	13	65
2013年2月18日	51	10	61
2013年2月25日	55	12	67
2013年2月28日	42	26※1	68
2013年3月4日	55	10	65
2013年3月7日	46	13	59
2013年3月11日	39	14	53
2013年3月14日	47	12	59
2013年3月18日	48	9	57
2013年3月25日	51	12	63
		総配食数	2,960

※2012年12月29日～2013年1月2日の間（越年中）に行ったアウトリーチの配食数

※1：他団体の炊き出しの時間帯と重なった為、炊き出しに訪れていた移動層が配食を受けたために普段よりも増加となった。

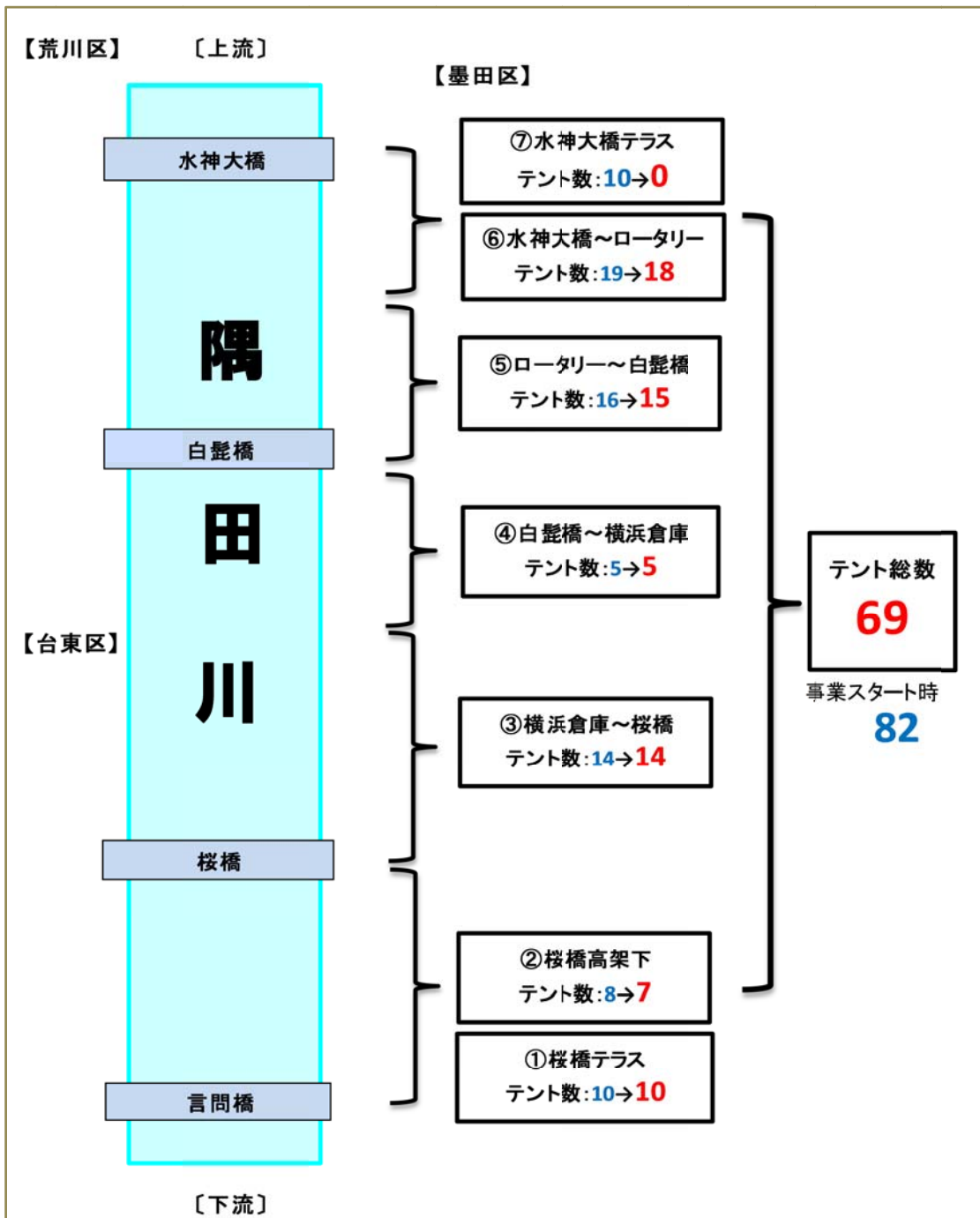
## 隅田川アウトリーチエリアのテント数の変動

調査日	総テント数（言問橋～水神大橋）
2012年05月07日（月）	82
2012年06月04日（月）	82
2012年07月09日（月）	79
2012年08月06日（月）	77
2012年09月03日（月）	79
2012年10月01日（月）	78
2012年11月05日（月）	75
2012年12月03日（月）	75
2013年01月07日（月）	74
2013年02月04日（月）	74
2013年03月04日（月）	68
2013年03月11日（月）	69



※増減の変動は、若者による路上生活者への悪戯や隅田川の浸水から避難したケース、行政へのテント撤去の通告により移動を余儀なくされたケース、疾病等により入院に至ったケース、アウトリーチ活動による生活保護へ繋がったケースなど様々である(台風から避難していた方が戻ってきたケースあり)。

隅田川(墨田区側)テント数 (2013.03.11 現在)

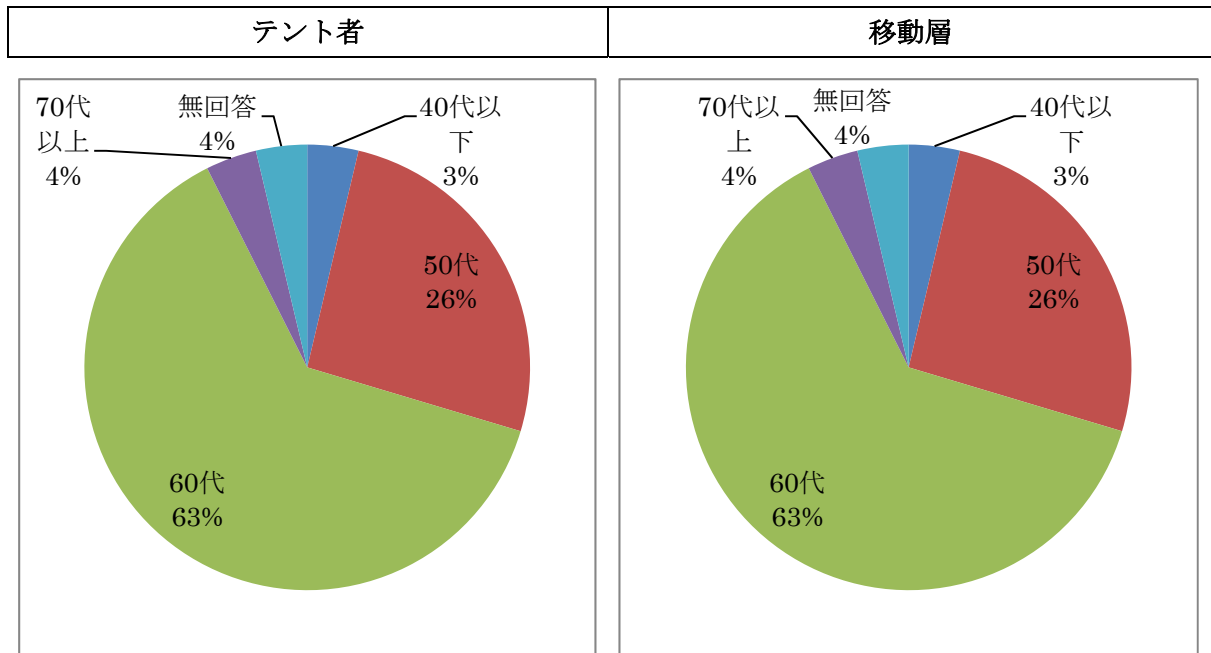


※青色の数字は本事業スタート時のテント数。赤字は事業終了時のテント数を示す。

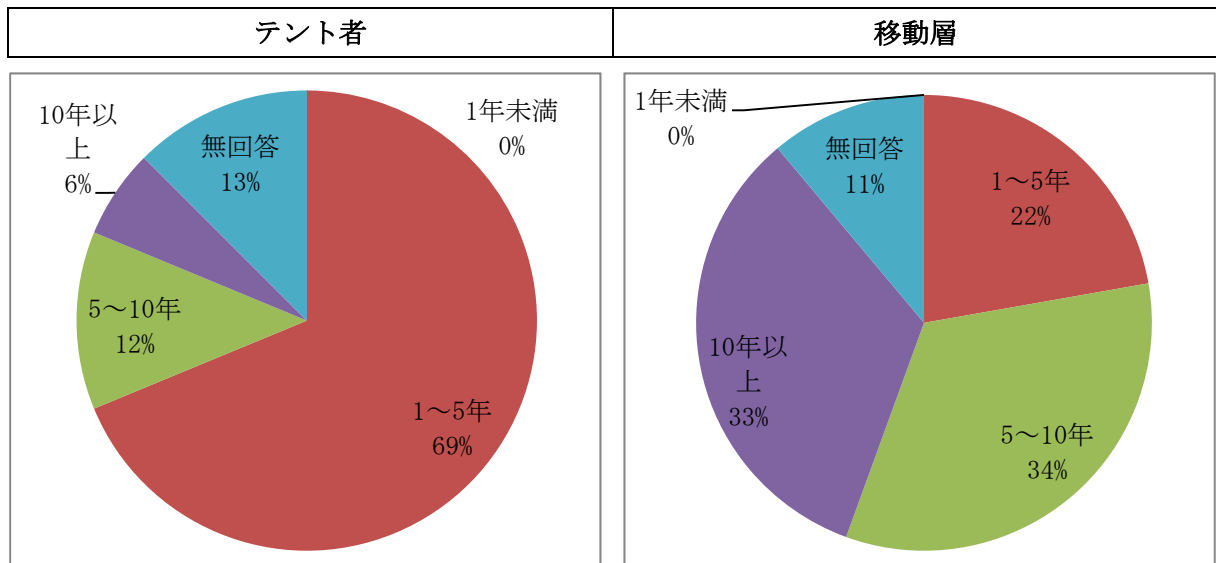
### 3-2 路上生活者に対するアンケート結果

調査対象：27名（テント）／16名（移動）

#### 年齢構成

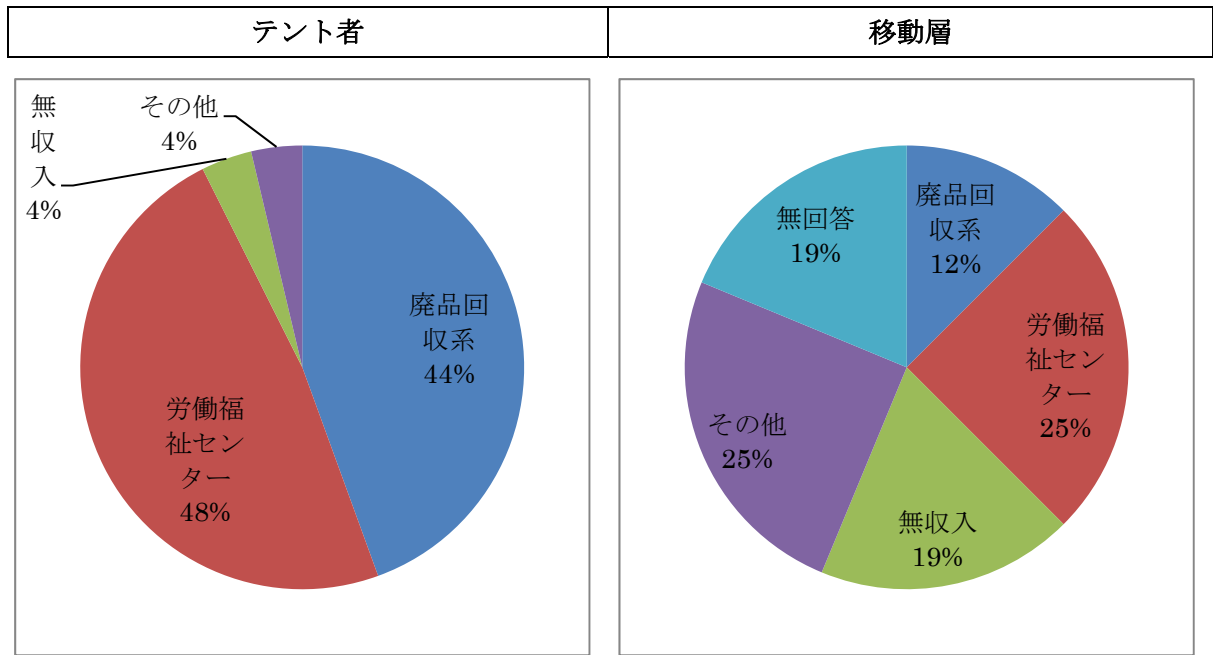


#### 路上生活歴

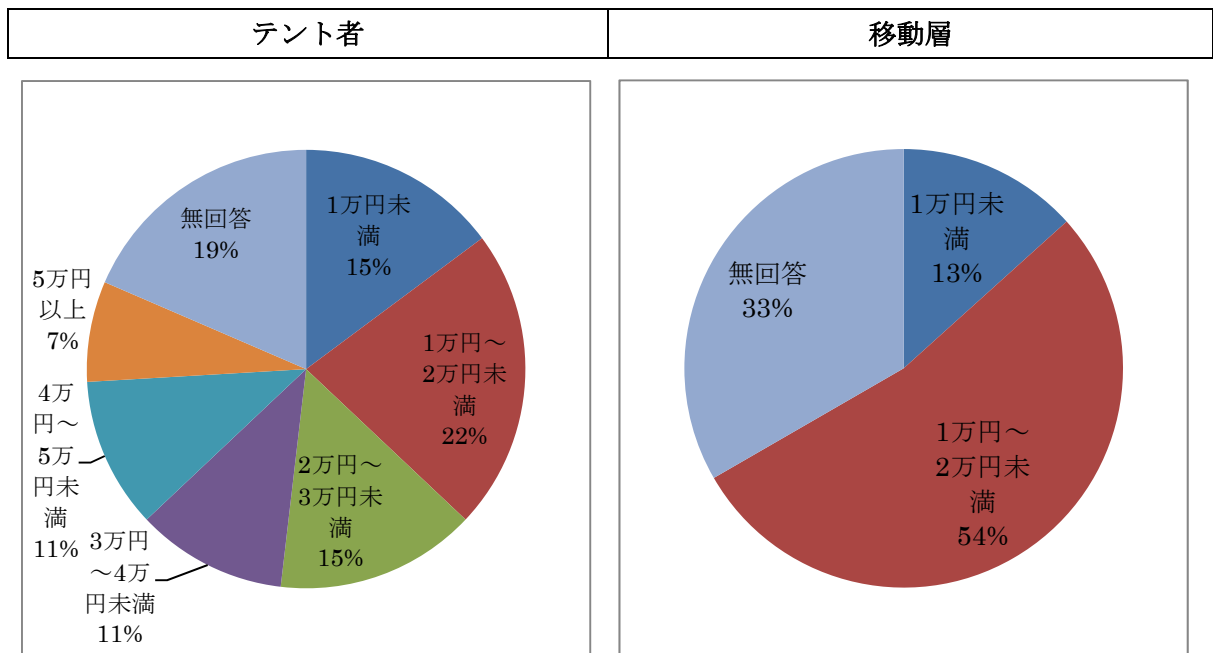




## 現在の主な仕事

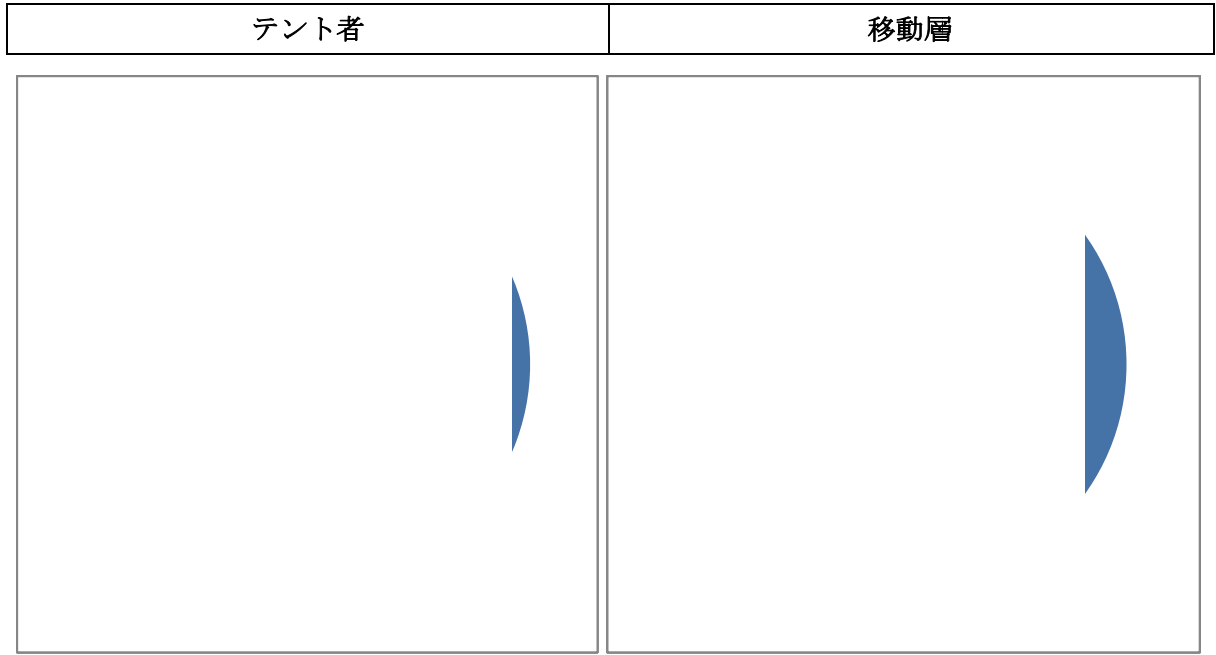


## 月の収入

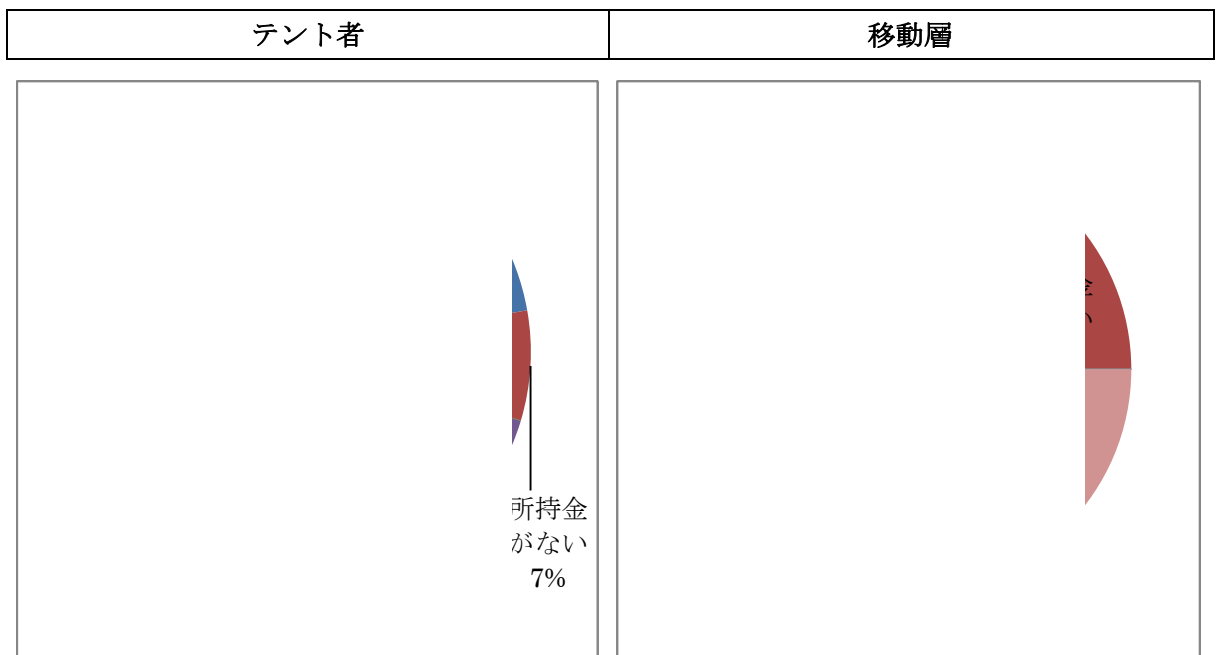


**現在の体調**

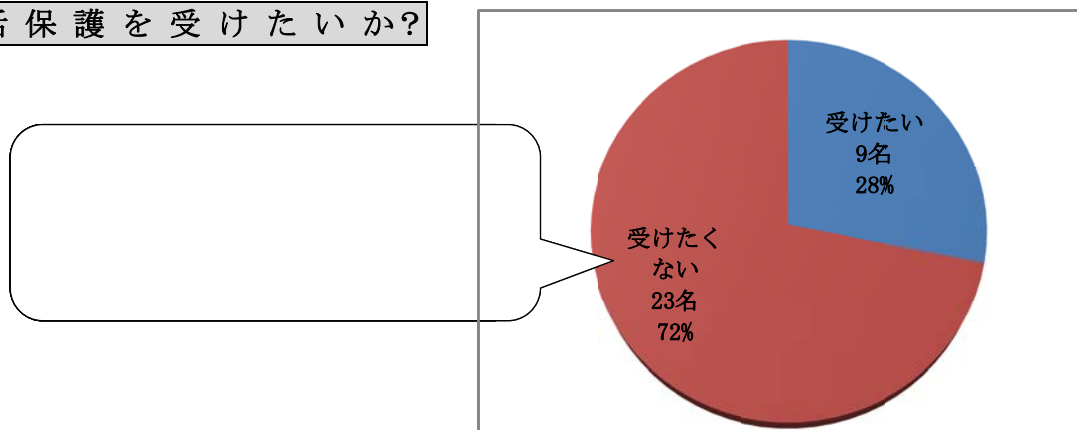
※あくまで本人の申告であり、実際の体調とは大きくことなることが予想される。



**現在困っていること**



**生活保護を受けたいか?**



### 3-3 路上生活者からの主な相談内容・アウトリーチの具体的な活動等

#### 【生活保護についての相談】

- ・生活保護に関して、「(生活保護を) 将来的に受けたい気持ちはあるが、まだまだ動けるし、仕事(城北労働福祉センター、玉姫職安、資源ゴミ回収等)もある為、体が動かなくなってから申請したい」との声が多くあった。また、「支給はしたいが、不安がある(理由は様々)ので、しばらく考えたいという」と最終的な決断に躊躇する声(特にテント生活者)もまた多く聞かれた。

#### 【路上生活者の傾向】

- ・生活や、生活保護、自立支援センター利用等の相談に関して、テントの人からの相談よりも、移動層からの相談の方が圧倒的に多い。
- ・冬になるとテントの中で過ごす人が多く、ストーブや暖房代わりにガスを使用する人が多い為、風邪と共に換気、火の元に注意するよう声を掛けている。依然として毎回60人前後の路上生活者と会うが、移動層の数が12人前後と特に多い。ほとんど決まった移動層の人たちがおにぎりを受け取りに来るが、毎回2人~3人程度は新しく出会う人である。また、他の路上生活者からおにぎりを配っていると聞いて隅田川に来たという人もいた。その他、1人の路上生活者の知人という女性(近所の都営団地在住)が定期的にその路上生活者を訪問して空き缶拾いを手伝っている光景が見られた。
- ・年末年始は寒さが増しているが、皆普段と変わりなく生活している様子であった。ふるさとの炊き出しについてはこちらの案内前に周知であり、スムーズに流れが進んだ。
- ・(年度末にかけての路上生活者アンケートより)50代(65歳未満)の路上生活者は「生活保護を受けたいが、就労しろ」と言われることで躊躇や拒否が見られるのに対し、60代(特に65歳以上)の路上生活者は「まだ働けるから(動けるうちだから、生活保護は)いい」と自ら申請を拒むケースが多かった。

### 各月の主な活動経歴・相談内容

#### 6月の主な相談・変化内容

- ・73歳：移動層 生活保護を受けたいが、考えてからにしたいとの事。
- ・65歳：移動層 生活保護の相談あり、来週生活保護の申請をすることを本人と約束を本人としたが、当日になり、拒否。(移動層の為か、以来接触できず)

#### 7月の主な相談・変化内容

- ・60歳代：テント者 体調不良になり、約9日前に病院へ緊急搬送となったと、他の路上生活者より話を受ける。
- ・48歳：移動層 今年の6月中旬から隅田川にて路上生活を送る。生活保護を希望し、出来れば入所する施設は相部屋ではなく、個室を希望すると本人。「今のところ当法人の事業所には空き部屋がない為、同行は可能だが、居住先は福祉事務所と相談になるという

ことを伝えると、「考えます」との返答。継続的に声掛けを行う予定であったが、以後、接触できず詳細不明。

- ・43歳：移動層 建築関係の仕事をしてきたが、現在は仕事がなく、仕事を見つけてもすぐに辞めてしまう為、自立支援センターに入所して就活に力を入れて探したいとの事。自立支援センターとはどういった場所なのか具体的に知りたいとの相談であった。自立センターについて説明をし、どうするかを本人に尋ねると、今週いっぱい考え、福祉事務所に緊急一時の相談に行きたいとの事であった。その後、本人から8月1日より緊急一時施設に入所予定となったとの報告を受ける。仕事を週に1回行っていたが、福祉から、現状で仕事を行っていると言われたようで、退職した模様。「いろいろ（相談に乗ってくれて）有難うございます」と話があった。

## 8月の主な相談・変化内容

- ・60歳代：テント者 自転車で転んで、足を骨折し入院していたが回復し、小屋に戻っていた。生活保護にそのままかからなかったのか聞くと、「まだまだ、路上生活の方がいい」と話していた。
- ・24歳：移動層 5月に職員が福祉事務所に同行し、緊急一時施設に入所したが、再路上となっていた。戻った理由は語らず。地元に戻りたいと話していた（以前は帰りたくないと話していたが）。今は交通費がない為、困っている模様（福祉事務所に行ってみよう伝えたが、福祉事務所への同行を拒否。路上生活者の友人もでき、福祉にはかかると本人。その後、山谷のドヤ街で路上生活を主にしているとのことであった。
- ・70歳代：移動層 三週間ぶりに会った。耳鳴りがあると以前相談があり、山友クリニックに通っているが、あまり改善していないとの事。9月3日に再開した際は、違う薬を処方してもらい、回復中との返答であった。

## 9月の主な相談・変化内容

- ・54歳：移動層）1年前に生活保護申請したが、断られたと本人から相談。仕事はしておらず、生活保護にも興味はあるものの、申請はまだ良いとの事。（今後も、継続的に声掛けを行っていく）
- ・60歳：テント ものもらいが出来ており、できものを潰していると話がある。目薬は持っているが、使用していないとの事。10月1日、訪問時に、様子を聞くと、だいぶ治ったとの事で、今のところ問題なし。
- ・スタッフ1名が、白髭橋付近のロータリー前にある公園で路上生活者と思われる人から、「おい、何ジロジロ見ているんだよ」と強く口調で声をかけられ、追いかけられそうになった。今後、スタッフは一人で行動しないように、自分たちが善意で行っていることでも相手にとっては嫌な気分になる場合もある事をスタッフ全員で再度確認。（路上で生活している＝人の世話になっていない。彼らにとってそれがプライドでもある）という内容を伝え、注意を促した。

## 10月の主な相談・変化内容

- ・移動層 「隅田川に来れば弁当がもらえる」と聞いて来た模様。早い時間帯には倍以上

の移動層が待っていたとの報告を聞く。今後、移動層が増えるようであれば、食数を増加していく予定。まずは、様子を見つつ、来た移動層に対しては相談対応した上で配食をしていく事とした。

- ・ 54 歳：移動層 他の NPO 施設に半年入居していたが、集団生活が嫌になり、再路上となった。糖尿病を患っており、生活保護に興味があるとの事。知人が埼玉で生活保護受給しながら暮らしているが、そこで一緒に生活保護にかかりたいとの考えがあると本人から話がある。今後、引き続き話をし、必要であれば、生活保護の申請同行をすることを伝えたが、以後、会えず。
- ・ 73 歳：移動層 8 月から耳鳴りがしていると話がある。また、高血圧（180）で、耳と血圧について紹介した、山友クリニックに行き、薬を貰っているとの事。服薬しても血圧は 160 前後で多少改善が見られたが、耳は変わらずとのこと。山友会の薬を変更してもらおう事を本人に提案した。また、精密検査等を希望するようであれば、生活保護を申請することを促したが、本人はもうすこし現状の生活を頑張りたいとの意向がある。次週、再度意向を確認する予定であったが、他の地域を移動している様で会えず。
- ・ 68 歳：移動層 水神大橋近くの高速道路下で路上生活（テントなし）。失職したために 10 年前より路上生活を開始（時折、缶集めや労働センターより仕事をしている）。血圧が 190～200 と高い。本人は生活保護を希望し、福祉事務所にスタッフが同行予定だが、同行の日程をどうするかを本人に話をしたところ、まだ働けるから、生活保護は当分いらないう話になった。
- ・ 66 歳：テント 生活保護を今後希望しているが、まだ、まだ考え中とのこと。今後も、継続的に声掛けを行っていく。

## 11 月の相談・変化内容

- ・ 11 月最初のアウトリーチは、数か月ぶりに配食数が 60 人以下であった。寒くなって来た為、移動層が川沿いに来なくなったためだと思われる。
- ・ テントで生活する路上生活者が、行政に通報し、新しく移動してきた別の路上生活者を追い出していたと話を聞く。行き先が無くなる路上生活者が今後同様に発生する可能性もあるため、交流を深め、何かあった時に相談しやすい関係を築くことが重要と思われる。
- ・ 60 歳 テント 生活保護を申請したいが、生活保護になると、兄弟に迷惑が掛かる（親族に連絡が行くことを懸念）との考えから拒否的であった。
- ・ 60 歳：テント 以前よりの目の腫れは引いているが、目がゴロゴロすると話す。山友クリニックを勧めるも市販でもだめだからタダの薬はなお効かないと拒む。特診券で医療を勧めるも気が進まない様子。今後も声掛けを継続していく。
- ・ 59 歳：テント 生活保護を受けたい気持ちがあるものの、一人では行きづらいとの話があり、生活保護の申請同行をすることを伝えたが、まだしばらくは良いとの事（今後も継続して声掛けを行っていく）。心臓、肝臓が悪いとの事。
- ・ 11 月になり、気温もいっきに低くなって来た為、路上生活者から、風邪薬を貰えないかとの相談が増加（現在は、薬を配る事をしていない為、山友会クリニックへ通院するように声掛けとチラシを配布して呼びかけを行っている）

## 12月の主な相談・変化内容

- ・60歳代：テント 当法人の施設に入所したいと相談を受ける。本人と施設職員で話をし、年明けに施設見学したいとの話があり、今後見学をしてもらう。
- ・70歳：テント 生活保護について興味がある様子であった為、生活保護について話をすると、「どんなものか知りたかっただけ」と本人。その後、申請について本人の意思を確認したが、興味はないとの事（継続的に声掛けを行う）
- ・70歳：移動層 生活保護を受けたいとの相談を受け、職員が話を聞くが、結局、まだよいとの結論。今後、興味があった際は、相談するとの事。
- ・59歳：テント 外出中に、誰かにテントを壊されたと話がある。今は、テントを直したくても骨組みがないため作れないと話があり、壊れたテントに住んでいた（翌週、テントが撤去されており、隣のテントの人に確認すると、福祉事務所に相談し、生活保護になった模様。
- ・70歳：移動層 生活保護を希望とのことであったが、翌週に待ち合わせの上、福祉事務所に相談同行予定であったが、当日、待ち合わせ場所に本人現れず。以後、消息不明。

## 1月の主な相談・変化内容

- ・65歳：テント 本人の話では、年金があるようだが、住所が無い為（本籍は九州）困っているとのことであった。以前、弁護士（新宿）に相談した事があり、行けば相談できるが、面倒で行きたくないとの事。次週詳しく話を聞く事で、本人と確認。その後、本人と確認し、福祉事務所に同行。生活保護となり、テントは撤去となり、当法人の施設に入所となった。今後、年金の確認とアパート転宅に向け、継続的に支援を行っていく。



## 2月の主な相談・変化内容

- ・65歳：テント 行政より、台風被害等で増水し、テラスは危険なため退去するよう求められており、生活保護を希望との事。翌週に、生活保護の申請を行い、保護となった。今後は、当法人の施設に入所し、アパート転宅を目指す。
- ・63歳：移動層 生活保護歴有、現在生活保護を考え中との事。翌週、話を聞いていく予定であったが、生活保護はまだよいとの事。今後、継続的に声掛けを行っていく。
- ・54歳：移動層 生活保護を受給し、施設に入所していたが、集団生活が苦手が出てきてしまったが、高血圧もあり、今後も生活保護受給を希望との事。翌週、生活保護の相談に行き、自立支援センター入所（入所までの期間は、無料低額宿泊所にて待機となった）
- ・60歳：テント 以前までは生活保護に関しては「まだいい」と話をしていたが、最近になり、興味があると話があり、3月4日の説明会に参加。やはり、もう少し路上で頑張りたいが、説明を聞いて安心したとの事。今後、生活保護を申請する際は、同行をお願いするとの事（継続的に声掛けを行っていく）

### 3月の主な相談・変化内容

- ・67歳：移動層 浅草にて移動層として生活、年をとってきたため将来を心配し、生活保護希望。生活保護の申請同行の為、待ち合わせをしたが、待ち合わせに現れず。以後、消息不明。

#### 3-4 説明会の感想

今年度は訪問活動のほかに、路上生活者たちに対して生活保護の仕組みやその後の流れ、施設での生活状況の説明や、それぞれの悩みに対して相談を主とする説明会を行った。

説明会では、路上生活者も熱心に質問をしており、結果好評であったと思う。例として、生活保護に住民票が必要かどうか、生活保護を受けた際に飼い猫をどうしたらいいか、アパートに行く際、契約時に保証人にふるさとの会がなってくれるか等の質問がでた。説明会後にアンケートをとったが、「役に立った」、「生活保護に興味がない為あまり役に立たなかったが、他の人の話を聞くのは面白い」、「テント生活は話し相手がないので説明会は良い」との意見があり、次回も機会があれば参加したいと好評であった。路上生活者同士の会話も盛り上がりを見せ、交流のきっかけになったようであった。また、普段のアウトリーチでは時間が足りず話せない事も話せる場として、説明会は非常に有意義な場であった。

#### 3-5 具体的な支援事例

##### (S.N 60代後半)

九州出身で、中学卒業後、タイル工として40歳前後まで就労する（その間はアパート生活を送る）。タイル工退職後は、土木関係の仕事に就き、以来60歳前後まで就労する。その間は、入居していたアパートが建て替え工事の為居住できなくなり、次のアパートに移り数年暮らす。しかし、建て替えの為に居住できなくなり、居所を喪失する。以来、隅田川沿いにテントを張り、路上生活となる。路上生活後も同会社（土木関係）で就労していたが、高齢になるにつれ仕事が無くなり、空き缶回収で生計を立てていた。65歳になり、年金が満期になったため、受給したいとのことであるが、住所登録地は九州のままであり、かつ現住居がない為、年金を受給出来ず困っていた（紹介で司法書士に相談したことが以前あったが、生活保護を受けるか九州に戻ることを勧められたとの事）。そのため、我々がテント訪問した際に、年金に関する相談を受ける。年金を手に入れる為には、住所登録が前提であるため、生活保護を勧め、福祉事務所に相談同行をし、結果、生活保護となる。以降は、当法人の共同住宅に入居し、アパート転宅を目指している。

##### (M.N 60代後半)

Y県生まれ。小学校まで同県で過ごし、中学校入学時に父親の仕事の関係で、K県に引越し中学校卒業。その後は進学せず、日雇いの仕事をして過ごしていた。20代後半からは、運送会社に勤め、大型免許を取得し、運転手の仕事をしたのち、町工場で30歳頃から10

年ほど働いた後、オペレーションセンター（人材派遣）に就職し、5－6年ほど勤める。10年ほど前に、テレビで隅田川の河川敷で生活している人の生活風景をテレビ番組で観て、しがらみのない生活にあこがれ、アパートを夜逃げ同然で出て、河川でテント生活を始める。5－6年前に東京都の「ホームレス地域生活移行支援事業」を勧められるも、猫を飼っていた為、手放すことが出来ず路上生活を継続。その後、行政よりテラスからのテントの撤去の勧告をうけ、隅田川の上流へテントと猫3匹を連れ移動。2、3年前から、生活保護の話をしてきたが、まだ働ける、集団生活はしたくない等の話が続いていたが、最近になり、テラスは台風の際に、墨田川が氾濫し危険な為、高速道路の高架下にテントを移動するように言われ、それが嫌であれば、生活保護の相談と一緒にいって行くと言われた。行政の職員と生活保護相談に行くよりも、毎週訪問している人に、一緒に生活保護の申請同行をしてもらいたいとの事で、生活保護申請の同行をし結果、生活保護の受給が開始となる。現在、当法人の共同住宅に入居し、「もっと早くに相談しておけばよかった。他の友人（テント生活者）にも話をし、今後相談にのってあげてほしい」という話が氏からある。

## 4. ボランティア

### 4-1 実績

この事業を行うにあたり、多くのボランティアがアウトリーチ、配食活動に参加した。多く聞かれた参加の動機として、「社会貢献がしたい」「自分も路上生活の経験があったので。少しでも助けに慣れたら」というものがあつた。人と人との絆が薄れている現在、誰かの役に立ちたい、という気持ちは多くの人が持っているのだと感じた。また、東日本大震災の支援を行っている大学生のボランティア団体からの参加も見られた。前年度に続き、多くの方が路上生活者の支援に関心を持っているのだと感じられ、参加者からは、「次年度もあれば参加を希望する」との声が多くあつた。1度きりの支援でなく、継続的に路上生活者との関わりを深め、相談しやすい関係を築くことが重要である。こうしたボランティアの存在は非常に貴重であり、引き続き支援を行っていく上での展望が見えたと思う。

### 4-2 ボランティアの感想

前年度と同様に一般応募をかけ、有償ボランティアをお願いした。実際に路上生活を経験した方や高齢の方など、今回の中心は40代～60代前後のボランティアであり、学生等の若い世代の参加は少なかった。ボランティアスタッフが路上生活者と年代が近い事や、似たような境遇の方もいた為、会話がしやすく、スムーズに相談が進んだと思われる。

#### ・有償ボランティアの感想（今年度の事業を通しての感想）

（Sさん）：こちらから生活保護の話をして路上生活者にして行かないと、相手も話をしてくれない傾向にある。話しかければ、「そろそろ生活保護（受けようかな）」と話を返してくれる。また、以前は配食した際にテントから手だけ出して受け取っていたのが、会う回数を重ねていくと、関係性ができてきたのか、お礼を言われるようになった。人とのつながり



は大切であると感じた。

(Kさん)：一昨年度、昨年度に続き今年度も参加した。何回も顔を合わせていけば、路上生活者から顔を覚えてもらえ、テント訪問時だけでなく道端ですれ違った際にも挨拶をしてくれる。一昨年度の事業の際には、路上生活者がそんな（挨拶をする）ことは無かった。

(Hさん)：色々と路上生活者と関わって、相手の本音を聞くのが難しいと思った。病気があったり、気になることがあったりすると「頭がちょっと痛い」など話をしてくれるが、生活保護に関する話はしてくれない為、どうしたらいいかわからなかった。本音を聞くためにも、説明会のように時間を取って話をしていく場は重要だと思う。また、アウトリーチを通じて路上生活者の中には陰悪な人（喧嘩っ早い人など）は見られなかった。

(Iさん)：去年の11月から参加しているが、路上生活者と関わって勉強になった。自身は当（法人施設の）夜勤として働いているが、その利用者は路上生活の経験者が少ないので、その方たちが今までどういった生活を送っていたのか垣間見る事が出来た。

(Nさん)：前年度より、生活保護を受けたいという人が多いと感じた。路上生活者も関わっていくと、その都度反応が変わっていく。積極的に交流するようになってきていると感じる。

(Hさん)：アウトリーチを行う前は、路上生活者はみんなヨボヨボしているのではないだろうかと想像していたが、便利な道具を持って、逞しく生活している人もいた。現状で生活が出来ており、縛られず自由にもいる為、この状態で良いと考えている人も多いと思うが、病気になってからでは遅いので、生活保護を受けたほうが良いと思う。



(Wさん)：路上生活者との信頼関係を築くためには、こちらも、本音をさらけ出して話をしていかなければならないと思う。話す際には「生活保護は考えていますか？」と声をかけて、相手が「考えているが、口下手だから（福祉事務所に相談に行きづらい）」と返すと、一緒に行くと声をかけるようにしている。

## 5. むすびにあたり

今年度のアウトリーチ活動では、訪問活動に加えて説明会を実施し、生活保護の仕組みや施設での生活に関する説明、不安に感じることや悩みの相談を行った。普段の訪問活動だけの関わりでは、なかなか本音をつかみきれないことがあったため、路上生活者のニーズや考え方、生活状況等を把握し、それに応えることで地域生活の第一歩を踏み出してもらおうとの狙いがあった。

訪問活動や説明会を通して、路上生活者の話を聞くと生活保護制度に対する誤った認識によって抵抗を示す人がおり、「65歳になるまでは自力でなんとか生活して行きたい（65歳にならないと生活保護の申請が受理されない時代が過去にあった）」、「生活保護になっても自由に使えるお金が少ない」、「施設での共同生活や規則が苦手」といった意見が出た。一方で、「生活保護にかかりたいが、具体的にどうしたらいいかわからない」、「生活保護にかかったあとの流れがわからず、躊躇している」との希望はしつつも、具体的な一歩が踏み出せない人もいた。路上生活者の考え方は様々あるが、あと一押しすれば地域生活に近づく人が多くいることがわかった。

毎週路上生活者と顔を合わせることで、前年度に比べ関係性がより深まり、上述のように様々な意見を得ることができた。訪問・相談事業の結果、生活保護や自立支援制度の利用をしたいと相談する人が増え、福祉事務所への相談同行を希望する人は7名となった。内2名が自立支援センターに入所、2名が生活保護を受けるようになり当法人が運営する共同住宅に入所。継続的な支援をおこなった結果、アパート転宅を目前にしている。3名は残念ながら相談の当日に姿を見せなかった。本人と福祉事務所への情報の提供だけで、同行は本人が希望しなかった3名が自立支援センターに入所となったことを加えると、福祉に繋がったケースは計7名となる。墨田川流域の路上生活者全体から見ると、ほんの数%ではあるが、この事業を通してもう一度、地域で暮らしをはじめの機会を提供することができた。

アウトリーチ活動は路上生活者にとって非常に有意義なものになっていると感じられ、訪問を毎週楽しみに待っている方もいる。一方で、我々が訪問した数日後に病気で救急搬送されたケースや、相談同行当日に現れなかったケースがあったことを考えると、路上生活者の些細な変化を感じ取ることや、連絡の取れる体制を強化するなど改善すべき課題も見つかった。このアウトリーチ活動を更に継続的に行っていくことにより、いつでも相談しやすい関係を維持し、1人でも多くの方の安心生活を実現していきたい。

生活保護を受けて地域生活を営みたいと考える人は少なくない。また、路上生活者が他の路上生活者を心配し、「ちょっと見てやってくれないか？」と声をかけてくるケースもある。この事業は隅田川の路上生活者にとって、周知のものとなっており、今後もこの事業を続けることは、支援を必要とする路上生活者にとって大きな助けとなるだろう。

以上